

教材研究と教材の扱い方 (17)

——「ガリヴァーとアリス」 外山滋比古——

菅原敬三

一

「ガリヴァーとアリス」外山滋比古 (2—東書—国総025) を取り上げて、教材研究と教材の扱い方について考えてみたい。少々長くなるが引用する。

『ガリヴァー旅行記』は世界じゅうの子どもに読まれているが、もともとは、児童文学などではなく、政治風刺小説だったのである。

十八世紀初めのイギリスの政治、社会は荒廃していた。それを作者のジョナサン・スウィフトが架空国、遠い国々からの視点で完膚なきまでに批判したのが、この「旅行記」である。いわば毒を持った物語であった。言うまでもなく、作中の人物には現実の实在する政治家、王侯貴族などのモデルがあり、当時の読者には、それがはつきりわかるようになっていた。したがって、人々はこれを風刺として読んだ。もちろん子ども

には分らない。外国人にも分らない。

しかし、十九世紀になると、そういう時事的要素が腐食してしまう。女王の前で綱渡りを演じる小人がなんとという政治家であるか、発表当時は、たいていの読者に分かつていたのが、注釈でもつかないと分からなくなる。説明されてもピンとこない。風刺としての生命は終ってしまったのである。風刺小説が風刺でなくなれば、ふつう、作品の存在理由は、ひとまず消滅する。隠滅してしかるべきものである。

実際、風刺文学は、話題性、時事性、つまりコンテクストに強く依存する様式である。時代が変わり、社会が変遷すれば、意味合いが変化し、理解されにくくなって、作品の生命は終わる。一般的に、風刺文学作品は短命である。後世に残りにくい宿命を担っている。『ガリヴァー旅行記』も十八世紀で文学作品であることをやめ、歴史的資料の文書になってもよかったのである。それがそうならなかったのは、作者の意図し

なかった読者が出現したためである。その新しい読者は、この小説を、風刺としてではなく、架空の物語として読んでおもしろいものと考えた。新しい意義、価値を発見したばかりではない。子ども向きの読み物として適しているということを見つけて出して、児童版のようなものが出版されるようになった。

痛烈な社会批判のつもりで書かれた作品が、こともあろうに児童向き読み物に変わってしまった。作者のスイフトが生きていて、それを知ったら、なんと言ったであろうか。少なくとも、ありがたいと喜んだりはしなかっただろうと想像される。

作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ。作者の想像もしなかった、更には好まないような生き方をするものがあるのは是非もない。その変化を与えるのは、いつの場合も変わりが無い。

『ガリヴァー旅行記』は、後世の読者の手によって脚色され、風刺から童話へと変貌して時代を超えた目覚ましい例である。作者の意図は踏みにじられたかたちで古典の列に加わったのである。

大人向きの作品が、子どもの読み物として生まれ変わり、長い生命を持つようになったのが『ガリヴァー旅行記』なら、逆に、子どもの読み物として書かれたものが、時を経て、大人の読み物になったのが、『ア

リスの不思議な国の冒険』である。ルイス・キャロルことチャールズ・ラトゥッジ・ドジソンは大学の数学の教師である。戯れに姪に話した物語が、この童話である。作者としては、これをはつきりと文学作品であるとは考えていなかったであろうと思われる。ところが、ドジソン生誕百年記念の催された一九三二年ごろから、ノンセンスというソフィスティケーションの高い言語芸術の作品として見直され、高く評価されるようになった。子どもの本としてより以上に、独自の幻想的世界は高い文学性を認められ、現代の詩人や小説家たちの発想にも大きな影響を及ぼすことになった。

『アリスの不思議な国の冒険』を大人の文学にしたのは、作者とはかかわりの無い後世の時の作用であつたとしてよい。作品に形を与えるのは作者であるけれども、その価値を左右し、決するのは、享受者、後生である。後生おそろべし。

後生によつて、作品は生きもし滅びもする。作品はそのまま生きることではなく、時として性格を大きく変えて生き延びることがあるのは、この二作品によつても知られるとおりである。作品の初めから終わりまで作者によつて決定され、それが絶対不動の重みを持つというのは、芸術作品を物象と見る者の一種の幻想である。作品は作者の手を離れたときのままで、後の時

代に生き延びることはできない。新しい時代の関所をくぐり抜けるには、なにがしかの犠牲を払い、その代わりに、新しい流通力を受けるのである。

(本文は『古典論』二〇〇一年刊による)

二

この教材は「国語総合」に収録されているが、高等学校の早い時期に学習するのに適している。常識的に知っておかなければならないことに加えて、論理的文章構成の学習にふさわしいからである。

結論が二箇所に述べられている。

作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ。作者の想像もしなかった、更には好まないような生き方をするものがあるのは是非もない。その変化を与えるのは、いつの場合も変わりがない。

『ガリヴァー旅行記』は、後世の読者の手によつて脚色され、風刺から童話へと変貌して時代を超えた目覚しい例である。(引用本文の40行から47行)

『アリスの不思議な国の冒険』を大人の文学にしたのは、作者とはかわりの無い後世の時の作用であつたとしてよい。作品に形を与えるのは作者であるけれ

ども、その価値を左右し、決するのは、享受者、後生である。後生おそろべし。

後生によつて、作品は生きもし滅びもする。作品はそのまま生きるのはなく、時として性格を大きく変えて生き延びることがあるのは、この二作品によつても知られるとおりである。作品の初めから終わりまで作者によつて決定され、それが絶対不動の重みを持つというのは、芸術作品を物象と見る者の一種の幻想である。作品は作者の手を離れたときのままで、後の時代に生き延びることはできない。新しい時代の関所をくぐり抜けるには、なにがしかの犠牲を払い、その代わりに、新しい流通力を受けるのである。

(本文63行から最後まで)

作者と作品、享受者との関係を考えると、一般的には作品は作者のものと考えられている。作者が作品を作ったからである。しかし、そうとは言えないというのが筆者の論である。「作品の初めから終わりまで作者によつて決定され、それが絶対不動の重みを持つというのは、芸術作品を物象と見る者の一種の幻想である」と言う。しかし、外山滋比古が言ったから、それが常識になるという訳ではない。作品の持つている本来的な性質に目を向けるならば、筆者の言っていることが納得できる。「作品は作者の手を離

れると、独立した生命を持つ」という真理は小説だけに当てはまる訳ではない。例えば、絵画の世界でも同様なことが言える。生前高く評価されていなかったゴッホのある絵画が、後世億が付くほどの評価を与えられるようになったことなども、その例である。

「作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ」という真理を、我々はいつの日にか自分のものとしなければならぬ。教師だから大人だからといって誰もが知っている訳ではない。この教材を通して知るといふ人も出てくるであろう。いつこの真理に出会ふかといふことは人によつて異なるであろうが、早いからその人が優れているという訳でもない。高校一年生の時に知るといふことも大切なことであろう。

以上のことの証明として、筆者は『ガリヴァー旅行記』と『アリスの不思議な国の冒険』を採用している。この事例も適確で、生徒にとつては馴染みがあつて分かりやすい。しかも、作品の価値の変化についての説明が同一の論理構造を持っている。読者に対する筆者の配慮であろう。

三

教材の扱いとして、この二作品を同じように扱うことはできない。時代と共に作品の価値が変化していくという点

では一致するが、変化の中身が逆である。『ガリヴァー旅行記』の場合は、「大人の読み物としての政治風刺小説」が「子ども向きの読み物」となり、『アリスの不思議な国の冒険』の場合は、「子どもの読み物」が「大人の読み物」となった。また、『ガリヴァー旅行記』の場合は、作品の変化が二段階になっている。

第一段階では、「十九世紀になると、そういう時事的要素が腐食してしまひ、風刺小説が風刺でなくなれば、ふつう、作品の存在理由は、ひとまず消滅する」はずであり、「歴史的資料の文書になつてもよかつたのである」。しかしそうはならなかつた。第二段階として、「この小説を、風刺としてではなく、架空の物語として読んでおもしろいものと考え」られるようになり「新しい意義、価値を発見し」「子ども向きの読み物として適している」と評価されるようになったのである。こういう段階を『アリスの不思議な国の冒険』は踏んでいない。この点はしっかり押さえておかなければならない。

その変化をもたらしたのは、「後世の読者」である。しかし、作品と読者の関係を広く考えたと「読者」の中には現代に生きる我々も入つてくるのであり、また「作品」の中には、現在出版された「作品」も含まれるという点も押さえる必要がある。

*

四

ここでもう一つ考えておかねばならないことがある。「作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ。作者の想像もしなかった、更には好まないような生き方をするものがある」ということがなぜ起こるかということである。

言葉を手段として成り立つ作品の場合を考えてみたい。例えば次のような例がある。「万引きは立派な犯罪です」。スーパ・ストーリーなどで万引き防止のための張り紙に使われていたものであるが、笑いを誘う例としてよく紹介される。単語レベルでの話だが、「立派」という言葉には、①美しいこと。みごとにこと。すぐれていること。②文句のつけようもなく十分なさま（「広辞苑」という意味がある。張り紙を作成した人物は②の意味で作ったのであろうが、読む側が①の意味で読んだ場合、そこに笑いが生じてくる。このように作成する側の意図は十分に付度されず、読む側や享受する側が勝手に解釈することも起こるのである。

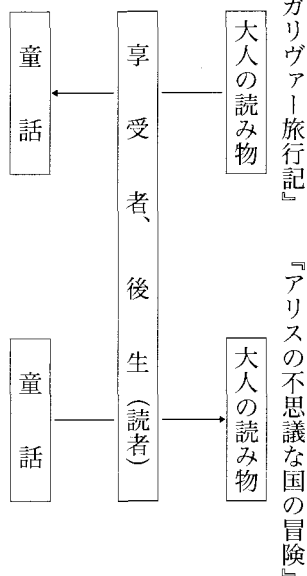
この例からも分かるように、制作者の意図とはかけ離れて作品は享受される。まして、沢山の言葉から成り立つ小説などの場合、それぞれの言葉が織り成す価値は多様になつてくるのである。読者や享受する側の解釈力・価値観がそこに加わった場合、プラスの評価、マイナスの評価を含めて作品の評価は多様になつてくる。

このことも、授業では押さえておきたい。

教材の扱い方に進みたい。全体を三〜四時間扱いにして、段落分けの後各段落を読解していくというやり方もあるだろう。しかし、こういう教材の場合、全体を三〜四時間扱いにして、毎時間全体を扱うことも考えてもいい。二、三、表現の難しいところはあるが、全体を把握するのにつまりく生徒は考えにくい。それを考慮しての扱い方である。

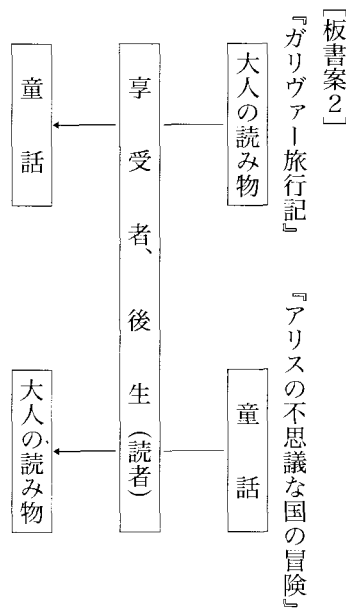
『ガリヴァー旅行記』と『アリスの不思議な国の冒険』の特性・価値の変化に注目すると、次のような板書が考えられる。

〔板書案1〕



「大人の読み物」と「童話」の位置を統一しようとする

と右のようになる。矢印の方向は逆になるが、「大人の読み物」と「童話」の内容が整理しやすい。しかし、この場合、「時」の流れが位置づけられない。時の流れを導入すると、次のようになる。



「大人の読み物」と「童話」の位置づけが逆になるが、本文の流れや時の流れが把握しやすくなる。授業展開としては、こちらの方がやりやすいであろう。この構図を変えずに三〜四時間を展開する。(完成図は後に示す)

*

授業計画としては四時間を考えたい。

第一時 全文通読と本文の基本的な構造を明らかにする。

第二時 『ガリヴァー旅行記』の二段階に亘る変化を明らかにする。また、享受者の果たした役割を明確にする。

第三時 『アリスの不思議な国の冒険』の変化の実際をとらえる。また、作品の価値や性格の変化に享受者が深く関わる理由を考える。また、言葉の特質と作品の持つている本来的な性質・特質をとらえる。

第四時 この作品が自分に与えた影響を考え、その実際を表現する。また、本文の結論部分を書写し、去来した自分思いをつづることを通して自己認識を深める。

各時の基幹の発問を示したい。

第一時

T1 全体を通読してもらいますが、本文の大きな論理構造をつかむことを目標の1とします。次の目標として『ガリヴァー旅行記』と『アリスの不思議な国の冒険』が出てきますが、それぞれが書かれた時の性質が時間の経過とともに変化していきます。どのように変化したのかとらえます。また、その変化に大きく関わったのが何かも考えます。(板書の基本構造を板書する)では読んでもらいます。

T2 今読んでもらいましたが、板書を見ながら適切な言葉を探してください。

T3 板書に書いてもらったように二作品の変化の有様がとらえられました。空白部に享受者、後生が入りますね。ここで少し補いたいのですが、享受者、後生以外にある言葉を付け加えたいのですが、何ですか。(読者、我々などの語を発見する)

T4 では、どのように変化したのか、説明された言葉を捜してください。：「大人の読み物」と「童話」ですね。板書しておきましょう。

第二時

T1 前時では、全体の構造をとらえましたが、今日はその内実を見ていくことにしましょう。まずは『ガリヴァー旅行記』に注目してください。この作品は「大人の読み物」としてあったものが「童話」に変化した訳ですが、その内実はどのようなものであったか、変化は二段階に亘って書かれています。今から読んでもらいますが、それがとらえられるように聞いてください。

第三時

T1 今日は『アリスの不思議な国の冒険』の変化の有様を見ていきます。そして、結論として筆者はどういうことを述べているかとらえます。そして、それは『ガリヴァー旅行記』の結論とどのような関係になつてい

るかを考えてください。その後、ここには書かれていないことですが、作品はどうして作者の意図とは異なつたものになつていくのか、その理由も考えていきます。これは非常に難しいことですが、大切なことです。みんなで解決していきましょう。

第四時

T1 今日はこの教材と我々と結び付きを考えるために、プリントの学習をします。プリントを見てください。課題が書かれています。課題によつてはそれぞれが独自の答えになると思います。その答えは自分独自のものですから、大切にしなければなりません。(プリント作業)

「板書」「教材観」「プリント学習の案」を示す。

「板書」

ガリヴァーとアリス

A『ガリヴァー旅行記』

大人の読み物Ⅱ風刺小説

18世紀のイギリスの

政界・社会

=

荒れていた

・完膚なき批判

・当時の読者には理解できた

外山滋比古

B『アリスの不思議な国の冒険』

子どもの読み物Ⅱ童話

チャールズ・ラトゥウヅ・ド

ジソン(大学の数学の教師)

が戯れに姪に話した童話

・作者は、これを文学作品として考えていなかったであ

ろう。

「第一段階の変化」 19世紀

・時事的要素の腐食

変化の理由

・風刺小説が

風刺でなくなった

・風刺の生命がなくなる

存在理由の喪失

読者（後生）・享受者＝後生畏るべし（作品の価値を決定する力を持つ）

「第二段階の変化」

童話

・児童向きの読み物に変わる
・架空の物語として
読んで面白い

本格的な文学作品

・一九三二年ごろ（ドジソン
生誕百年記念）
・ノンセンスというソフイス
ティケーションの高い作品
として見直された

・独自の幻想的世界
（高い文学性）

◎ 作品が持つている本来的な性質とは、どのようなものか。

・ 作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ。
・ 作品に変化を与え、価値を与えるのは、読者、後生
である。

◎ 「作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ」と
いうことが、なぜ起こるか？

ガリヴァーとアリス 外山滋比古

教材観

『ガリヴァー旅行記』と『アリスのふしぎな国の冒険』
を知らない人はいないであろうが、現在読まれている作
品とは全く異なる制作事情であったことを知る読者は少
ないであろう。

『ガリヴァー旅行記』が当時の政界や社会の風刺が目
的であったこと、『アリスのふしぎな国の冒険』は、作
者が戯れに姪に語った童話であり、文学作品としての制
作意図はなかったこと、これが制作意図の実際である。

では、両作品をそれぞれ童話、大人の文学作品として
評価し価値付けたのは誰かということが大きな問題とな
る。

「作品に変化を与え、価値を与えるのは読者、後生で
ある」というのが筆者は説明であるが、これは筆者独自
の意見ではない。言葉というものは、本来的に奥深さを
持つており、その奥深さを持った言葉の織り成す世界は、
必然的に作者の意図を越えて新たな意味や世界を創造す
るからである。それを筆者が「作品は作者の手を離れる
と、独立した生命を持つ」ち、「作品に変化を与え、価値
を与えるのは、読者、後生である」と言ったのである。

しかし、世の中では作品の生命は作者の意図の下にあ

ると考える向きが多い。例えば、ある作品が入試問題に採用され、その問題を作者自身が解こうとして解けない。

「これはおかしい。私はそんな気持ちで書いていない」などということが報道されたりするが、「作品は作者の手を離れると一人歩きする」ということを理解していないことから起こる誤解である。

この作品を教材として提供する意味は、どういう点にあるのであろうか。一つに「作品は作者の手を離れると、独立した生命を持つ」、「作品に変化を与え、価値を与えるのは、読者、後生である」ということを生徒に理解させ、生徒自身のものの見方に取り入れさせることがある。

二つに、筆者の論の展開の仕方、対極にある作品を提示し、同一の結論に持つていく対比や構成の明確さが挙げられよう。これらの学習を通して、生徒のものの見方の拡充、深化を図っていきたい。

目標

1 『ガリヴァー旅行記』と『アリスのふしぎな国の冒険』の成立事情と作品の価値との関係を理解するとともに、作品が持っている本来的な性質を理解し、自分のものの見方の拡充、深化を図る。

2 筆者の論の展開の明確さを理解し、効果的な評論文の書き方を学ぶ。

3 論の展開に効果的な技法、特に対比の効果を学ぶ。

4 この教材が自分に与えた影響を、自覚的に捉える。

ガリヴァーとアリス 外山滋比古 (プリント作業用)

「ガリヴァーとアリス」を読んで

1 ①分かったこと(新たに自分のものの見方に取り入れたいこと)、②意外に思ったこと、③疑問に思ったことは何か。

2 この本文を読んで、自分の考えやものの見方に影響があったか。あったとすればどのような所か。

3 次の箇所を書写しよう。

(1) 40行から47行

(2) 63行から最後まで

教師の側のねらいとして、次のことを考えておきたい。
千字、二千字でレポートを書かせる。

〔目標〕（・早い時機から表現することを習慣化する。

・理解領域における表現力の育成。）

・自己認識力を育てる。

・論理的思考力を育てる。

・表現力の育成。

〔留意点〕

・結論の置き所

・書き出しの工夫

・論の展開

・効果的な引用、明確な論拠

書写を行わせる。（行数は引用本文による）

書写を通して結論の重要性を実感させる。

・ 40行から47行

・ 63行から最後まで